

第1章 学級経営よもやま話

第6節 集団づくりA to Z

今回は、学級集団づくりの基礎理論編になります。

この節は、

■学級集団の概念■

■なぜ集団づくりなのか■

■学級集団の特性をとらえる■

■「集団は1日にして成らず」「すべての道は集団に通ず」■

の4つの項から成っています。

■学級集団の概念■

ここで考えようとしているのは、「個」と「集団」の関係をどう整理するかという問題である。それは、めざす学級集団像を規定することであり、集団づくりのプロセスを規定することでもある。

学級集団をどう作るか

2006.3

1. 学級集団作りの理念

(1)はじめに

集団主義教育という場合、通常、マカレンコに代表されるようなソ連(現ロシア)のそれを指す。同和教育における集団作りがそれを強く意識しながら展開されてきたことは、私の経験からも事実であると思う。「みんななかま」「一人はみんなのために、みんなは一人のために」といった標語が、多くの教室に飾られて

いたものだ。そしてそれは、個人の能力主義を強く主張する教育運動への対立軸でもあった。したがって、そちらの側からは「同和教育は個を甘やかす教育だ」といった批判が絶えず存在した。私は同和教育の作風に共感していたし、自らも良き実践者でありたいと努めてきた。私は、優れた実践には批判されるようなことはないと思っていたが、対立の時代というのは窮屈であり不幸だ。

1990年代の半ばになって、欧米型の人権教育が紹介され、実践が広がっていく中で、同和教育における集団作りが質的に転換していく。端的に言えば、「個」が強調されるようになる。個を鍛えること、独り立ちした個が集団として機能することが求められた。私個人に関して言えば、それは学級を離れ同和教育をプロデュースする仕事に携わっていた9年間の出来事だった。

もう一度学級に戻って、自分自身の実践によって検証したい。そんな思いを胸に、2002年4月、10年振りに教壇に立った。

(2) 集団作りの理念 ～「個」と「集団」をどう位置づけるか～

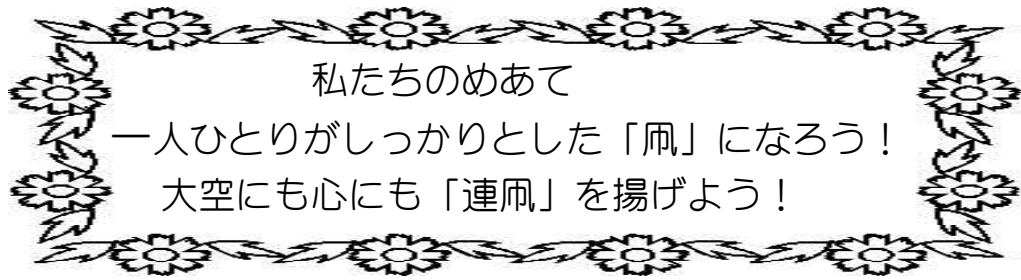
実のところ、集団作りにおける「個」と「集団」の関係が、私の中では10年前とさほど変わったわけではない。ことさらに一方を強調するから話がおかしくなるのであって、要はバランスの問題だ。時代の振り子は「個」の側に触れようとしている。そうではないのだ。

2005年度6年生のクラスでは、「一人ひとりがしっかりとした『凧』になろう！大空にも心にも『連凧』を揚げよう！」という「私たちのめあて」を子どもたちに示した。



私たちの課題が見えてきた

6年生最初の1か月が過ぎました。ふわふわとした羽毛にくるまれたような、優しい時間が経過していきました。教室に流れる空気(ムードと言ってもいい)はとてもいいと思います。しかし、ムードだけではやがて物足りなさを感じる日がやってきます。ぼくが今感じている課題を示したいと思います。



私たちのめあて

一人ひとりがしっかりとした「凧」になろう！
大空にも心にも「連凧」を揚げよう！

私たちのめあては2つです。それぞれのめあてについて、具体的に述べていきましょう。

■一人ひとりがしっかりとした「凧」になるということ

自分の五感で見聞し、自分の頭で考え、自分で判断したことを、自分の言葉と行動で表現する—そうした生き方をすることが、自分を大切にすることになるのです。ぼくが「自分」という言葉にこだわるのは、一人ひとりが人生の主人公になってほしいと願うからです。人の意見に耳を傾けることと、判断や行動を人任せにすることは全く違います。

同じものを見聞きしても、感じ方や考え方はさまざまです。したがって、言葉や行動で表現されることも人によって違います。すべての人の顔が違うのと同様に、考え方や表現も違っていいのです。この違いを「個性」と言います。

一人ひとりがしっかりとした「凧」になるということは、個性(自分らしさ)を大切にすることです。静かすぎる授業はだめです。ワイワイガヤガヤが一杯の教室にしましょう。いろんな考えや答えがあるから学習が深まるのです。仕事をするときには、指示される前に動きましょう。新しいアイデアは、自分から働きかけることによって生まれるのです。

■大空と心に「連凧」を揚げるということ

「凧」を1本の糸でつなぐと「連凧」になります。しかし、それでは「連凧」の魅力を説明したことにはなりません。「連凧」は、1枚1枚の「凧」をつないで作ります。それぞれの「凧」は揚がるように作られているのですが、ちょっとかたむくものや、すぐに落ちてくるものもあります。その点では人間の「個性」と似ています。それら1枚1枚の「凧」を25枚つないだ「連凧」は、最もよく揚がっていた1枚の「凧」よりもなお勢いよく揚がるのです。人間に置き換えて言えば、25人の「個性」が集まることによって30人分も50人分のパワーになるのです。これが「連凧」の魅力です。

きみたちの1つ先輩は、運動会の応援団や音楽発表会、映画作り、きみたちとのバスケットボール大会などで、すてきな「連凧」ぶりを見せ

てくれました。きみたちはどんな「連凧」を揚げるのでしょうか。大空に勢いよく舞う「連凧」をぼくは毎日思い描いています。そのためにも、まずは自分という「凧」をみがいてほしいと思います。

人が凧と違うのは、大空だけではなく心にも「連凧」を揚げられるところにあります。心に揚がる「連凧」は、目で見ることはできません。それは、大空にいくつ目かの「連凧」が揚がったとき、ポッと姿を見せてくれるのです。それがいくつ目かは分かりません。いつごろかも分かりません。見ないままに卒業を迎えることだってあるでしょう。

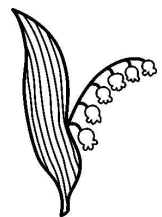
心に揚がる「連凧」のことを「なかま」と言います。「仲良し」とはまた違って、言葉で言うのは難しいのですが、ぬくもりがあってほっとできるような時間と空間が広がっています。ぼくは、きみたちと一緒にこの時間と空間を見たいと思います。

おうちの方へ

定期の家庭訪問が終わりました。ご協力ありがとうございました。子どもたちは、多くの人の思いや生活を小さなランドセルに詰め込んで登校しているんだと改めて感じました。私やクラスに温かいまなざしを注いでいただいていることをとてもうれしく思います。

この1か月の生活や家庭訪問を踏まえて、1年間の学級目標を立てました。「凧」と「連凧」は、「個」と「集団」の課題をシンボル化したものです。「個」については、全体的に線の細さを感じています。「しっかりとした『凧』」をめざす中で、人間の根っこの部分を太くたくましいものに鍛えたいと思います。6年生のスタートを歓迎してくれた子どもたちを、「このクラスでよかった」と言って卒業させてやるのが、私の仕事だと自らに課しています。そんななかま集団を育てることが、「心に『連凧』を揚げる」ということだと考えています。

どうか知恵と技と体力を貸してください。



遡って、2003年度5年生のクラスでは、学級開きの日に「たんぽぽの花のように生きよう!!タンポポのようなクラスを作ろう!!」というめあてを提示した。



■ ■ 小学校5年・学年つうしん

蒲公英

2003. 4. 7 (月)

No. 1



たんぽぽの花のように生きよう!! タンポポのようなクラスを作ろう!!

きょうから5年生。

みなさんのなかまに入れてもらうことになりました。よろしくお願
いします。



〇〇です。
よろしく!

高学年のスタートです。たくさ
んの楽しみが待ち受けています。

同時に、今までにない責任の重さも待ち受けています。

学校がみなさんにとって楽しいところになればいい
なあと 생각합니다。勉強っておもしろいなって感じても
らえたらいいなあと 생각합니다。そして、25 人の一人ひ

とりが、自分らしさを精一杯^{せいいつぱいはつき}發揮できたらいいなあと 생각합니다。――
そんなクラスをみんなの力でつくりましょう。

ところで、学年つうしん「蒲公英」(この難^{むずか}しい漢字は「たんぽぽ」と読みます)のことですが、この
タイトルは、みなさんへの二つの思いを込めて付け
ました。



たんぽぽの花のように生きよう!!

タンポポのようなクラスを作ろう!!

みなさんには、これが何のことだか分かるでしょうか。あれこれと
想像^{そうぞう}をめぐらせてください。そして、学校の周りにたんぽぽの花が咲
いたら、先生の思いをお話しします。



■小学校5年・学年つうしん

蒲公英

2003. 4. 22 (火)

No.5



たんぽぽの花の秘密に迫る!!



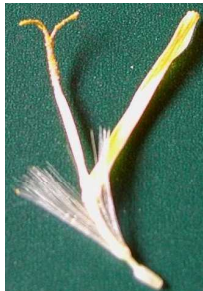
まずは3年生理科の復習。植物は、「葉」「くき」「根」という3つの部分でできている。そして、「葉」の変形したものとして「花」がある。「花」は、「花びら」「めしべ」「おしべ」「がく」で構成されている。レンギョウを例に確かめてみよう。



さて、タンポポの花はどうだろうか。



「花びら」「めしべ」「おしべ」「がく」はどこにあるのだろうか。花びらがい



っぱいあってよく見えない。そこで、花を半分に割ってみた(上の写真)。そうすると、左の写真のようなものがぎっしりと並んでいる。観察してみよう。

1枚の「花びら」だと思っていたものは、実は1個の花だったのだ。



つまり、タンポポにはそれぞれに一人前の花がいっぱいあって、それらが集

まって一つの「花」立していながら、集



を形作っているのだ。それぞれが独まった姿が美しい。そんなタンポポ

の花を、みんなに紹介したかった。

たんぽぽの花のように生きよう!!

きみたちは25人の5年生の中の一人ではない。世界にたった一人のきみなのだ。上の写真の5つの花を見てごらん。みんな表情が違うだろ。かけがえのない自分を生きてほしい、かけがえのない自分をみがいてほしい、かけがえのない自分を輝かせてほしいと思う。「たんぽぽの花のように生きる」とは、オンリーワンの自分を生きるということだ。

タンポポのようなクラスを作ろう!!

かけがえのない一人が25人集まって、■■■小学校の5年生がある。上の写真の5つの花はそれぞれに表情が違うのに、まとまりとしてのタンポポは美しい。一人ひとりが独立した個人であり、個性的であってほしいと同時に、クラスという集団として輝いてほしい。それぞれのよさを生かしながら、一人ひとりを輝かせてくれるクラスを作りたい。それが、「タンポポのようなクラスを作る」ということだ。

——そんな思いを込めて、始業式の日「蒲公英」第1号をきみたちに手渡した。課題は大きく高い。一緒に頂上をめざそう。

私は、学級集団作りのイメージを「たんぽぽ」と「タンポポ」、「凧」と「連凧」といった具体的なものに置き換えて子どもたちに示してきた。結果的には、これはかなり有効だった。卒業前にある子はこう書いた。「今まで私たちにみんな共通のめあてというものはありませんでした。だけど、先生が連凧をテーマに私たちのクラスのめあてを考えてくださったおかげで、みんなが一つのめあてに向かって前進することができました。そして見事、私たちは心の中に連凧をあげることができました。この一年間、本当にありがとうございました。」

■なぜ集団づくりなのか■

30年近く前、障害児学級担任をしていた時のことだ。教室の後ろから子どもを見ていると、前に立っている授業者には見えない世界が見えてくることがある。

その日、3年生のクラスでは、算数の授業が行われていた。一通りの説明が終わって、練習問題になった。しばしば見かける光景だが、教科書や筆箱や自分の手で、できる限りノートを隠す女の子がいた。担任は黒板に問題を写し、何人かの子に前に出るように言った。——やがて、答え合わせになった。担任は黒板の

解答を確かめ、赤チョークでマルを付けた。子どもたちは、それを見て自分のノートにマルを付ける。次の問題も同じようにマルを付ける。授業が終わって、担任は子どもたちにノートを提出させた。一人ひとりの出来具合を確認するためである。

ノートを隠しながら問題を解いていた女の子は、全問マルだった。

担任が黒板にマルを付け子どもたちの方をふり向いた時、彼女は赤鉛筆をもってみんなと同じようにマルを付けた。そして、担任が次の問題の解答のために黒板の方に向き直った瞬間、彼女は黒鉛筆に持ち替え答えを書き直した。その次も、そのまた次も、そうした。――それが、彼女の全問正解の真実だった。

私は、彼女の行為を咎めようとは思わない。しかし、悲しく思う。

彼女にノートを隠させたものは何だろう。赤マルを付けた後にこっそり答えを書き換えさせたものは何だろう。――それは、間違いなく、教師だ。

私は、学級集団づくりについて考える時、いくつかの場面に混じって、決まって先のマル付けの場面を思い起こす。私たち教師の仕事は、精一杯ノートを隠そうとする手を解き放ってやることではないのか。「なんで」「分からへん」と呟かせてやることではないのか。彼女が自分のできなさをオープンにできるようにするには、クラスにそれをできる空気が流れていなければならない。その空気を作るのも、私たち教師の仕事ではないのか。

つまり、子どもたちが安心して自分を表出できる教室の空気を作ることが、一人ひとりの子どもの学びを保障する前提なのだ。私は、「なぜ集団づくりなのか」と問われたら、「すべての子どもが安心して学べる教室にしたいからだ」と答える。

やはり30年あまり前のこと。(第1章第4節「学級通信」9ページの再掲になります)

私は、修学旅行で亡き母への土産をまっ先に買ったIの話をした。「おっちゃん」と同居しながら「私はお父ちゃん似や」と五条にいる父に思いを寄せる南(仮名)、その彼女が夏休み前、お母ちゃんと「おっちゃん」においてけぼりにされたことを話した。亡父の姓「松山(仮名)」と母の姓「Mo」と母の主人の姓「Sa」の3つの姓の間で生きる松山のことを話した。幼い頃別れた父への思いを胸に生きるHaのことを話した。6月から3か月間父が行方不明だったSuのことを話した。

子どもたちの顔がゆがんだ。「わたし、びっくりした。ほんとにびっくりした。一人一人の家庭の中にこんなことがあるなんて考えもしなかった。みんな何くれぬ平気な顔でくるんだもの。きのうとかわらぬ顔でくるんだもの

の。」とFは書いた。「先生の話を書き聞いていきたくなくなった。いつもならちゃんときいていないのに。すごく、なんていったらいいかわからないぐらい、すごくかなしくなった。なきたくなかったけどなかった。すごくこの時間はよかった。」とMは書いた。「今、先生が話してくれたので私の心はすっきりしました。」南はそう書いた。松山は「ぼくはほっとしました。たぶんHaもほっとしたと思います。」と書いた。彼ら、彼女らは、自分の一番の“秘密”を内緒にしておきたいと思うのと同じくらいに、みんなに知ってほしいと思っているのだ。言えるだけの条件がそろいさえすれば……。

それだけではない。松山のことを「Mo君」（この時の担任の名前）とからかって呼んで遊んでいたというのだ。父親が行方不明でしずんでいるSuに「ネグラ」という言葉をあびせていたというのだ。

子どもは想像以上に深いところで“しんどさ”を背負って生きている。まわりの子がその彼におうちのパンチをくらわせていることさえある。それは、「ひごろあそんだりしているぐらいでは、とてもわからぬ」（Oの作文）いことである。“なかま”とか“なかまづくり”という言葉を私たちは安易に使う。しかし、“なかま”とは何と語るに易しく育てるに難しい言葉であろうか。

教師が、もちろん周りの子どもも、その子の重い「荷物」を肩代わりすることはできない。しかし、「彼ら、彼女らは、自分の一番の“秘密”を内緒にしておきたいと思うのと同じくらいに、みんなに知ってほしいと思っている」のだ。ただし、これには「言えるだけの条件がそろいさえすれば」という「条件」が付く。その「条件」とは、「話したことで不利益を被ることはない」「間違いなく受けとめてくれる」と思えることだ。そんな関係を作るのが、教師の仕事だ。

ことさらに、しんどいことを話す必要はない。しかし、知らないがゆえに「まわりの子がその彼におうちのパンチをくらわせていることさえある」のだ。これは、教師の無為の結果だと言えないか。

なぜ集団づくりなのか――それは、すべての子どもが安心して学べる教室にしたいからだ。「教室を子どもが安心して過ごせる場所に」と言う時、子ども丸ごとを包み込むための“守備範囲”は限りなく広い。この広さが、集団づくりの奥深さになっている。

どこまでが教師の仕事かという線引きは意味がない。また、強要されることでもない。ただただ、教師の「痛覚」の問題だ。先の事例で「ネグラ」という言葉を耳にした時、我が心に痛みを感じるのかどうかだ。

ような状態となり、子どもたちが積極的に行動し活気と笑いのあるクラスになるという。

(2010-10-10 朝日新聞 朝刊 教育 1)

■ 「新しい診断尺度 QU を用いた学級経営」 (河村茂雄) ■

I Q-U (Questionnaire-Utilities) の開発経緯

- ・ Q-U は「級友」にも引っかけた診断尺度である。
- ・ 「活用しないことには意味がない」という思いを込めて「Utilities」としている。
- ・ 平成3年から4年にかけて、山形県をはじめ地方でのいじめや自殺が続いた。文部省はいじめ防止月間を指示、教育相談システムの検討も指示した。その中で子供たちが逃げ込む場の確保が話題になった。また、子供たちの日常観察の他に、子供を知るテストがほしいと要望があった。従来の心理テストはあるが、項目数が多く、教師が忙しい中でも使えるものを、という要望の元、Q-Uの開発に着手した。
- ・ 1980年代にも中学、高校が荒れた。その時には、教師が力で子供たちを押さえ込んだ。それは結局、真の問題解決にならず、問題を深く沈み込ませることになった。問題は見ようとしないと見えなくなった。いじめられていると親や教師に話すことは自尊感情を低下させることにもなるため、なかなか話す生徒はいなかった。特に中学生は「ちくる」ことも嫌だという感覚が強い。そのような見えない問題を見えるようにする診断尺度として Q-U の開発に着手した。いじめ被害や不適応の子供たちをスクリーニングすることもねらいとした。
- ・ 問題数は少ないが精度が高い。
- ・ 教師が簡単にパッとできることを骨子としている。

II Q-U の理論的背景

- ・ マズローは欲求階層説を発表した。人間の欲求は「基本的欲求 (衣食住)」から「安全欲求」、「所属欲求」、「承認欲求」等を経て最後に「自己実現欲求」に至るといふ説である。欲求は下の階層の欲求が充足されてはじめて、上の階層の欲求にいくという考え方である。
- ・ 中でも「所属欲求」は中学生の場合、特に強い。第二次反抗期で親を否定

する。しかし、一人ではまだ立てないので仲間を必要とする。だから、クラスで無視されるようなことは非常につらい。また「承認欲求」も強い。クラスの中で自分は認められている、必要とされているという思いを求めている。

- ・大学生の自殺が、内戦状態にある国は少ない。なぜか？ その基本的欲求を満たすだけで精一杯だからである。日本のように恵まれた国は、基本的欲求や安全欲求を満たされ、所属、承認欲求に目がいく。その段階の欲求が充足されず、自殺に向かう学生が多いということである。

III Q-U の構成

Q-U は「いごちのよいクラスにするためのアンケート」と「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の2つからなっている。

(1) いごちのよいクラスにするためのアンケート (学級生活満足度尺度)

- ・学級生活満足度尺度は横軸（x 軸）に所属欲求を、縦軸（y 軸）に承認欲求を持ってきている。所属得点を「被侵害得点」とし、例えばいじめを受けている場合は得点が高くなり、軸の左方向に進むように設定している。また、承認得点をそのまま「承認得点」とし、クラスで認められていると感じるほど得点が高くなり、軸の上方向に進むように設定している。
- ・x 軸と y 軸の直交する交点が「0」でないのは理由がある。開発時に全国の学校から集めたデータの平均に合わせて、軸をずらしているからである。当初のデータは全国の附属小中学校データであり、被侵害得点は低く、承認得点が高いという「満足群」の子供が多かったが、その後、様々な学校のデータが加算されたため、「満足群」の子供が減り、その結果、軸の交点の位置が「左に、下に」ずれてきている。
- ・学級生活満足度尺度を実施すると、子供が次の4群にプロットされる。
 - 満足群（承認得点高く、被侵害得点低い。プロット図の右上に配置）；学習意欲、友達との関係良好、活動意欲など十分な子供たち。1次対応でOK。
 - 非承認群（承認得点低く、被侵害得点低い。プロット図の右下に配置）；学級に嫌なことはないが、何となく楽しくない子供たち。目立たないし、通知票で所見が書きにくい子供たちがここにプロットされる。高校生はここに入ると、退学する生徒が多い。アルバイトなどの学校外の活動に楽しみを見いだすからである。教師の適切な支援が必要であり、2

次対応となる。

○侵害行為認知群（承認得点高く，被侵害得点高い。プロット図の左上に配置）；2種類の子供がここにプロットされる。学級生活への意欲は高いが，人間関係でトラブルを持っている子供，または，被害者意識の強い子供の2種類である。自己中心的な子供がここに入りやすい。この子供たちも教師の適切な支援が必要であり，2次対応となる。

○不満足群（承認得点低く，被侵害得点高い。プロット図の左下に配置）；いじめを受けている，学習に向かえない，学級がつまらないなどの子供たち。時間の経過と共にさらに状態は悪くなり，3次対応が必要。

- ・学級生活満足度尺度は，今，子供は○次対応が必要なのがわかり，個別対応の必要性が見えてくる尺度である。また，いじめや不登校の発生を事前に予測できる尺度である。・尺度は子供を選別するためのものではない。援助ニーズが必要な子供を事前に見いだすためのものである。尺度はアンケート形式であり，子供自身の思いを書くものである。文部省は，「本人がいじめと思ったらいじめである」という見解を示している。「ちゃんとやりなさいよ」という友達からの言葉かけをいじめと感じる子供もいる。訴える子供には2種類あるということ。一つは子供同士の関係性の中で訴える子供（関係性の問題），もう一つは被害者意識の強さから訴える子供（認知の問題）である。後者の認知上の問題を抱える子供にも対応していないと，その子供たちは不登校に陥っていく。
- ・Q-U は，この学級生活満足度尺度のプロット図の活用が多い。なぜ，子供たちが不適応やいじめなどの問題行動に陥ったのか，その動機を調べるために実施してみると，8割の生徒が不満足群にプロットされているクラスは，授業が不成立，いわゆる学級崩壊の状態になっており，集団というより烏合の衆のようであった。そのようなクラスの場合は，調査拒否をされる場合も多い。一方，満足群に8割の生徒がプロットされているクラスは，気がつくと一緒に給食を食べてきているようなクラスであった。自分たちで新聞を作ったり，クラス全体に自治ができている。
- ・学級生活満足度尺度を年間5回実施させてもらい，研究するなかで，学級の状態が不満足に至る規則性があることに気づいた。
- ・教師は学級の状態がなぜよくないのかわからないし，わかりたくない。なっている子供を益々かわいがるし，原因がわかったところでどうしていいかわからない。クラスの子供たちは仲間が信じられず，疑心暗鬼になっている。不満が一カ所にまとまり，その矛先は教師に向かい，その時だけ，クラスが一致団結する。もうその時点での相談ではどうにもならない。学級崩壊してしまったクラスはいじめ，不登校の生徒も多く，ゴミも散乱

するようなクラスである。こうなってしまったら、もう教育云々ではなくなる。危機介入となり、子供たちがこれ以上クラスで傷つかないように、そして、学習権を保障するためにチームを挙げての対応となってしまう。それ故に、そうなる前に Q-U の尺度を使って、学級の状態を把握した方がいいという提言をしたい。

- Q-U は学級崩壊の流れが読める。一つの例。ルールが比較的しっかりしているクラスは、6、7月に徐々にプロット図の右側に偏って生徒が「縦伸び」に分布する。この段階での対応なら学級の状態が改善可能である。対応しないと「縦伸び」が「右上から左下に伸び」に変化する。左下、すなわち不満足群の生徒はどうするか。自分を納得させるために、周りの生徒を引き下げようとする心理が働きだし、クラス全体が不満足群に引っ張られるようになる。学級崩壊の6、7割がこのパターンをとる。二つ目の例。優しい先生のクラスは、6、7月に徐々にプロット図の上側に偏って生徒が「横伸び」に分布する。個の状態はそのままにすると、やはり「右上から左下に伸び」に変化する。後は同じ崩壊パターンをとる。
- Q-U 活用の必要性とは何か。集団の状態を100%つかむことはできないが、何かしらの目安を持つことは大切である。目安を持つことで、クラスの動きがわかるようになる。
- プロット図の状態を見て、担任があきらめてはいけない。状態を見て、何らかの手を2週間打ってみた。しかし、結果が出なかった。すると担任は悪いことばかり考え始める。子供の行動が変わるには1、2ヶ月かかる。担任がその間、どのように気持ちを持ち続けるかがポイントである。「先生は変わっていないと言うけれど、分布が少し変わったよ」と周りの先生方が見えることが Q-U の良さである。

(2) やる気のあるクラスをつくるためのアンケート (学校生活意欲尺度)

- 子供が学校や学級に満足するのはいろいろな背景による。小学生は「友人関係」「学習意欲」「学級の活動」の三つである。教師との関係は「学級の活動」に含まれている。中学生はさらに「教師との関係」「進路意識」「部活動」が入ってくる。このように満足感にはいろいろな領域に関する意欲が絡むということである。
- 満足感が低い時、どこから対応するかは2次対応である。その目安として、学校生活意欲尺度が使える。「どこでつまづいているのか」「そうか、友人関係か」ということが見えてくる。
- 満足感がすごく低い生徒がいたとする。その場合、逆に低い中で、高いと

ころが一つでもあればそこに対応のポイントを置く。例えば、部活が高ければ、そこから介入する。

IV これからの教育実践への活用の指針

- ・ 1970年代の指導は画一的。その時の不登校は7千人。1990年代は文部省が不登校に対する見解を変えた。「不登校は全ての子供に起こる可能性がある」。不登校の子供たちはうまく人とかかわったり、集団生活に乗っかたりするのが苦手であると文部省が認めた。
- ・ 1997年、学級崩壊がマスコミに登場した。そして、不登校が都会だけでなく、地方にも増えだした。ただ集まっただけで集団ではなくなった子供たち。放っておくとそのままのいる。以前はリーダーが集団をまとめた。仕切る子供は嫌われる時代。今は集団を動かそうと思ったら、集団を育成しないといけない時代。育成と同時に、動かさなくてはならない難しさが学校にはある。10, 11月に崩れていくタイプは集団の育成がしっかりできていないクラス。
- ・ 学級の全員が満足群にいるのは、小学校で4%, 中学校で2%でしかない。かなりの生徒が満足群にいる集団の特徴は何かと言えば、「子供たちが社会的スキルを持っている」「相手がまじめな話をしたら聞く」ということである。つまり、マナーやエチケットをしっかり持っているクラスということである。
- ・ うまく人とかかわれない子供たち。少子化ということ、家の中ではスターであること、周囲からの徹底した期待があること、昔よりも今の子供たちは認められたいという欲求が強い。写真やビデオも小さい頃から撮られまくっている。
- ・ 周囲から認められたいなら、自分からかかわっていけばいい。しかし、それをしない。なぜか？ 人間関係には「ストレス」と「生き甲斐」が背中合わせである。人とつきあうのは「生き甲斐」となるからつきあう。他にもプラスαがあるからつきあうのである。生き甲斐が見えないと、ストレスがたまり出す。ストレスを避けようと動くと、人と距離を置くことになる。傷つきたくないの、防衛的になる。
- ・ 人とかかわるようにするにはどうしたらいいか。マナーを一つ一つやっていくしかない。子供が話を聞かなくて困るという時、教師が見本を見せることである。最後まで話を聞かせるには「短く」話せばいい。そして、最後まで聞いたという経験を重ねていくことである。はじめは3分なら聞く。「よく聞いたね」とほめ、同じように小さなマナーを育てていくこと。こ

れは日常の場でもどこでもである。

- ・集団を育てるには最低限のマナーを積み重ねていくことである。ソーシャルスキルトレーニングは学級経営に大きなかわりを持つ。
- ・なぜ学級が崩壊するのか。教師の指導力不足と言われるとがっかりする。相談に来ている教師は一生懸命な人が多い。ただその熱意がずれているということ。「集団の把握がうまくない」という一言に尽きる。
- ・教師はなぜ不安が消えないのか。なぜだめなのか、なぜうまくいっているのかという整理をしていないからである。そのやり方を教師は習っていない。それに、1970年代まではそれでもよかった。そこで、一つの方策となるのが Q-U である。教師がある程度の共通の道具を使えば情報を共有でき、しかも協力ができる。そして、問題の解決ができる。子供の心を育てることができるのは学級である。心を育てる最後の砦は教師である。「これだ」という方策を探っていきたい。

2 Q-Uを教室へ

少し古いですが、河村茂雄さんのいじめに関する新聞記事をまとめたものを紹介しよう。

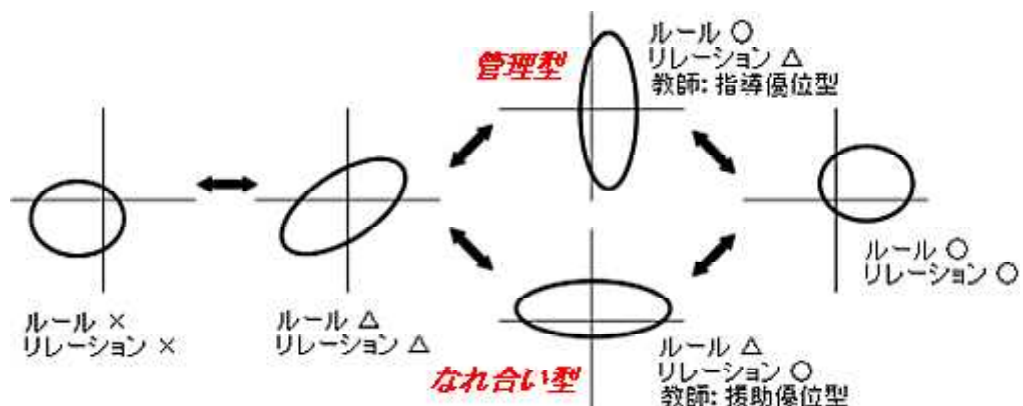
いじめの原因を考えると、

教師と子どもの関係で決まる学級集団の全体的な特性

に注目すべきである。

「管理型」の学級と「なれ合い型」の学級

教師の子どもへの接し方には、①有無を言わず従わせる指導タイプ、②子どもの言い分を尊重する援助タイプ----がある。①に偏ると「管理型」、②に偏ると「なれ合い型」になる。



1998年と2006年の比較

- ・ なれ合い型の学級は小学校で倍増して半数近くを占め、管理型は半減。
- ・ 中学校では管理型が主流だが、なれ合い型は倍近くに増えた。

※ さらに小学4～6年生（約5000人）について詳細にみると「長期間いじめを受けてつらい」という子どもの所属学級は、約半数がなれ合い型で、管理型は3割強だった。

2006.11.24 毎日新聞

イフーがある。子供の満足度の高い学級を維持する教師は、状況に応じて両方を使い分けるが、①に偏ると「管理型」、②に偏ると「なれ合い型」になるという。

98年と06年を比べた場合、なれ合い型の学級は小学校で倍増して半数近くを占め、管理型は半減。中学校では管理型が主流だが、なれ合い型は倍近くに増えた。さらに、小学4～6年生（約5000人）について詳細にみると「長期間いじめを受けてつらい」という子どもの所属学級は、約半数がなれ合い型で、管理型は3割強だった。

河村教授によると、なれ合い型では、当初は教師と子どもが良好な関係を保つかに見えるが、最低限のルールを明示しないため学級はまとまりを欠き、子ども同士の関係は不安定でけんかやいじめが生まれやすい。教師の「〇〇してよ」という友だち口調の指示を誰も聞かなくなり、放置すれば学級が崩壊するという。

また、運動や勉強が得意だったり、けんかの強い子供が学級をまとめ、教師が頼りにするケースも多いが、その子供や取り組みが特定の子供をいじめの標的にし、学級全体が同調した場合、なれ合い型では、教師が止めるのは困難で、助長や加担の恐れもあるという。

河村教授は「なれ合い型を生まない学級を作るか、教師たちが議論することが大切」と話している。【井上英介、吉田裕都】

「長期間のいじめに苦しむ子」のいる学級の特性

	なれ合い型	管理型	満足群
	52	32	16

学級全体に各特性が占める比率

	98年			06年		
	なれ合い型	管理型	満足群	なれ合い型	管理型	満足群
小学校	26	50	24	45	25	30
中学校	9	66	25	16	58	26

単位%

「なれ合い型」の学級でいじめが生まれやすい

なれ合い型では、当初は教師と子どもが良好な関係を保つかに見えるが、最低限のルールを明示しないため学級はまとまりを欠き、子ども同士の関係

教師と教え子友だち感覚

なれ合い学級いじめ多く

都留文科大調査

教師が教え子に友だち感覚で接する「なれ合い型」の学級でいじめが生まれやすいことが、河村茂雄・都留文科大教授（心理学）の調査で分かった。こうした学級では、教師が子供に引きずられ、いじめに加担する恐れもあるという。いじめは、加害者側の資質や教師の指導力不足に直接の原因が求められがちだが、河村教授は「主に教師と教え子の関係で決まる学級集団の全体的な特性に注目すべきだ」と訴えている。（社会面に関連記事）

河村教授は、全国の児童生徒約5万人を対象に、教師や同級生との関係などを問う「QUTテスト」と呼ばれる心理テストを行い、分析した結果、言いつ分を尊重する援助タ

河村教授によると、教師の教え子への接し方には①有無を言わず従わせる指導タイプ②子供の

河村教授は、全国の児童生徒約5万人を対象に、教師や同級生との関係などを問う「QUTテスト」と呼ばれる心理テストを行い、分析した結果、言いつ分を尊重する援助タ

は不安定である。

ルールが示されていない学級では不安定な状態を避けるため、3～4人の小集団が多数生まれる。この小集団は排他的で、共通の秘密や共通の敵（いじめの標的）を作り出すことで結束を強める。

小競り合いが激化して学級崩壊に至るか、発言力のある子どもが他の集団を従え教室を支配する。特定の子やグループの教室内での力が教師の指導力を上回れば、いじめは止められない。

教師の毅然たる態度

なれ合いを避けるには、一人一人の声に注意深く耳を傾ける一方で、全体に対しては最低限のルールを毅然とした態度で示し、ルール違反には例外なく厳しい姿勢で臨む必要がある。

また、「管理型」、「なれ合い型」を状況に応じて使い分けながら、満足度の高い学級を維持する

一つの打開策としてエンカウンターと Q-U がある。

Q-U による学級集団の理解

河村茂雄

明確な計画がない中でエンカウンターを取り入れても効果は少ない。単なる思いつきや面白そうだったからという理由では系統性のない取り組みになってしまう。これは、「エクササイズ主義」とも呼ばれている。

エンカウンターが効果を生むのは、「今、クラスの現状は～だから、〇〇というエンカウンターをやってみる」という発想でエクササイズを行うときである。今、この学級集団はどんな様子なのか、それに合わせて行うエクササイズはどんなものがよいのかを考えることが大切である。

子どもの実態を把握する（＝アセスメント）手法には、観察法、面接法、調査法の3つがある。どれが優れているということはなく、3つの手法を組み合わせることで、実態がよりの的確に把握できる。

学級の実態として把握しておきたい視点は2つある。①学級内に確立されているルールの程度と、②リレーションの程度である。ルールの確立の度合いを知っ

ておくことで、活動させる人数や時間、インストラクションなどの構成をどのようにすべきかの目安ができる。またリレーシヨンの確立の度合いを知っておくことで、エクササイズの内容だけでなく、エクササイズでねらう事項を絞り込むことができる。

「楽しい学校生活を送るためのアンケート（Q－U）」を使うことで、学級内のルールとリレーシヨンの状況を短時間で測定することができる。「Q－U」で、子ども個々の実態を把握した後、観察法や面接法を加えると、かなり具体的なアセスメントが可能となる。エンカウンターを実施する際、「Q－U」を使ってアセスメントを行い、結果を比較していくことで実施効果の測定も可能である。

Q－Uは、“児童生徒の意識”に加えて“学級集団の状態”が映し出されることから、いじめや不登校、学級崩壊の兆候を捉え、その未然防止とよりよい学級づくりに生かすことができます。特に、視覚的に提示された情報をもとに、教師が複数の目で一つの学級について話し合うための手がかりを与えてくれることが特長です。既に全国の教師の間で高く評価されています。

各学級担任においては、得られた結果について、他の先生方と共に検討する中で、現状を客観的に捉え、課題を見だし、今後の学級経営の展開に反映させていくことができるでしょう。自分の学級を開くことに、当初は戸惑いや抵抗を感じるかもしれませんが、教育のプロとして、冷静な目で、建設的な方向で意見を述べ合うことにより、新たな発見や工夫がなされるだろうと期待します。

構成的グループエンカウンター（SGE）とは

（草尾まとめ）

エンカウンターとは「心と心の触れ合い」あるいは「本音と本音の出会い」を意味するもので、構成的グループエンカウンターは、「エクササイズ」と「シェアリング」で構成される。

構成的グループエンカウンターは、リーダーを中心に展開する集団学習体験（作業、討議、学習シートなど）を通して自他についての理解を深め、温かな人間関係を築くことにより、行動の変容と人間的な自己成長をねらうものであり、症状の除去や直接問題の解決を図るものではない。

（1） 構成的とは、[方法] のこと。

時間・人数・場所・活動の内容・ルールなど、枠が決められているということです。

枠を決めることのメリット

- ◎ 参加者が自分の気持ちをありのままに話すことを促進する。
- ◎ 話し合いの中で傷つけられることが少ない。
- ◎ 指導者にとって実施しやすい。

(2) グループとは、[対象が集団]ということ。

集団の教育力を利用するわけです。

(3) エンカウンターとは、[ホンネとホンネの交流]

ホンネとホンネの交流 = 心と心のふれあい (辞典：出会い、遭遇)

開発的カウンセリングが、子どもたちの人間関係を積極的に育てるための方法として注目されているが、その一つに「構成的グループエンカウンター」がある。

現在、SGE への関心が高まりつつあり、様々な場面で実践が見られるようになってきている。学級で取り組むなかで、子どもたちの相互理解が進むとともに、自己肯定感が高まり、互いに支え合う温かな人間関係が育っていくという効果が見られる。

一方、SGE の実践化に向けて、「学級づくりに向けた計画的な取り組み」「子どもの実態に合わせたエクササイズの選定」「指導者としての力量の向上」などの課題が挙げられる。

※ エクササイズ

SGE を構成する主要な要素で、心理面の発達を促す課題のこと。主たる内容は思考・行動・感情の共有を誘発するもの。これがふれあう人間関係をつくる。

※ シェアリング

「わかちあい」の意。エクササイズを通して気づいたり感じたりした、自分のことや他者のことなどをホンネで伝え合い、共有し合う。SGE の柱の一つ。

※ 開発的カウンセリング

開発的カウンセリングには、構成的グループ・エンカウンター (SGE)、ソーシャルスキル・トレーニング、アサーション・トレーニングなどがある。SGE は他の開発的カウンセリングの技法をいくつか共有しており、学校の教育活動の様々な場面で幅広く活用できる可能性をもっている。

3 Q-Uのすすめ

私は、6年前にQ-Uに出合った。以来、自学級で実践しつつ、校内への普及を図ってきた。4年前に今の学校に異動したが、この2年間は全校で取り組む態

世界が違う。「集団」「なかま」と同じ言葉を使いながらも、この言葉の意味世界は決して“共通語”ではないのだ。

私が「学級集団」と言う時、それは単に構成員による集合体を指す言葉ではない。担任教師と構成員である子どもたちによって作られた、ある種の価値観を伴う芳しい「空気」というものがある。その“芳しい「空気」”は、担任にとっても子ども一人ひとりにとっても居心地のよいものだ。「学級集団」とは、この「空気」を共有する集合体のことだとイメージしてもらえばよい。

したがって、たとえクラス替えのない学級であったとしても、担任教師が替われば、「学級集団」がリセットされるのは自明のことだ。

“芳しい「空気」”は一朝一夕にできるものではない。「集団は1日にして成らず」なのである。

学級で取り組んでいるあれやこれやを、片っ端から書き出してみよう。

学級の係活動、班活動、学級通信、グループ学習、……。書き上げていけば、学級で行っているどれもこれもが学級集団づくりにつながっていることに気づくだろう。「すべての道は集団に通ず」なのだ。

「すべての道は集団に通」じているのに、「集団は1日にして成らず」とはどのようなことだろう。一見矛盾する2つのテーゼの間にはどんな関係があるのだろうか。

すべての教育活動は学級集団づくりにつながっているのだから、特別に考えなくても集団はできあがる――というのは、まちがっている。

先ほど“芳しい「空気」”という抽象的な表現を使ったが、これはめざす集団像と考えればよい。“芳しい「空気」”を作るという意図を持ってあらゆる教育活動を組み立てた時、その結果として学級集団が形成されるのである。

集団づくりとはそういうものだ。詳細は、第3章第1節「学級文化と集団づくり」を参照してほしい。